

今こそ中・高生にどのような英語教育が必要か

—外国語教育における基礎・基本とは—

加藤 栄一

はじめに

平成元年の学習指導要領改訂において、「コミュニケーション能力」という概念が重視され、「オーラル・コミュニケーション」という科目が登場しました。ALTの学校配置が進み、いわゆる「チームティーチング」が行われるようになりました。

さらに平成11年の改訂においては、外国語の目標が「実践的コミュニケーション能力を養う」ということになりました。「日本人は何年英語を勉強してもろくに話せない。これからは国際化時代である。直接外国の人とコミュニケーションする機会が増大する。積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度が必要だ。」などと言われています。(もし英語を話せることが国際人の条件なら、アメリカ人の幼稚園児はもう立派に国際人になっているということになるのですが…)おそらく、経済のグローバル化によって企業がますます多国籍化しているため、財界からの要請も多分にあるものと思われます。

これに伴い、中学校における授業もかなり様変わりしたようです。また高等学校においても、今までは考えられなかったほど英語力の低下が見られるようになりました。

今の英語教育の流れは、日本人が外国語として英語を学ぶ上で本当に正しいものなのでしょうか。今こそどんな英語教育が必要なのか、私なりに少し考えてみたいと思います。

1. 中学英語の変化

以前の中学校の英語教科書は、be動詞から始まり、その否定文・疑問文を学び、次に一般動詞とその否定文・疑問文を、そして今度はcanに始まる助動詞、それから時制(過去から未来やがて現在完了へと発展)と、系統的に学んでいくものでした。その中

で、現在を中心に過去・未来へ、そして現在完了へと、いわば縦軸に延びるものと、否定形・疑問形といういわば横軸に幅をもつものが、体系的に習得されていたように思います。

また2年生では、不定詞・動名詞を学んで「句」という概念が出てきたり、受動態を学んで同じような内容の文でも主語を変えて表せることを知ったりし、そして3年生では、名詞を修飾する不定詞・分詞、that節、さらに関係代名詞節と、系統的に学習していきました。

内容面においても、『mujina』『最後の一葉』『くもの糸』といった物語や文学作品、さらに論説的な文章も多少混ざっていました。また各Lessonには、その単元のポイントになるkey-sentenceが載っていました。

以前、新学習指導要領に基づいた中学校の教科書を見る機会があり、それまでの教科書とは大きく様変わりしているのに驚きました。ほとんどが会話文で、単元においてどの文がkey-sentenceなのかわかりにくくなっていました。また、文法の体系もあまり重要視されていないように感じられました。

2. 基本文法の必要性

私は中学で初めて英語を学んだわけですが、ある時期につまずき、英語がわからなくなったことがあります。そのときある方が、ポイントを説明しながら教科書のkey-sentenceを復習してくださり、それを何度も音読し、暗唱しました。やがて英文の中心になる主語と動詞の結びつきが意識でき、先に述べた英語の時制という縦軸と否定・疑問という横軸がつながり、受動態・不定詞・動名詞といった働きが理解できるようになると、英語が一気にわかるようになりました。また、大学生のときに中学生に英語を教える機会がありましたが、主語と動詞の結び

つきに加え、時制とその否定・疑問がわかると、英語が急に得意になる生徒に何人も出会いました。

中学時代を英語の初期学習期と考えるなら、その時期の文法の学習は絶対必要ですし、ここでつまずいてしまうと英語がさっぱりわからなくなる可能性があります。実際、断片的な表現の練習のみに終始しては、将来高校で学習するであろう複雑な英文を読みこなすことは不可能です。アメリカで生まれた子どもが親から英語を学ぶのと、日本人にとって外国語である英語を学ぶのは根本的に違うということ認識しておかなければなりません。確かに最終的な目標は実践的なコミュニケーションのレベルでの英語だということには異論ありませんが、英語を学び始めた日本人には気の遠くなるようなゴールです。そこに至るためには、ある時期に集中して、しかもかなりの時間を英語の学習に投入する必要があります。

しかし、現在の学校の教育条件を考えてみた場合、そのようなことが果たして可能でしょうか。勉強するのは英語だけではありません。数学もあれば国語もあります。体育だって芸術だって、教育の目標である人格形成には大切な教科です。学級規模にしても、たとえ小人数クラスで授業を行うような工夫が可能だとしても、40人学級のままでは限界があります。

そんな中で、将来国際社会で貢献できるような実践的な外国語能力を身につけることが必要であるとしたら、中学・高校時代に何を学ぶべきなのでしょう。断片的な会話表現を身につければいいのでしょうか。それとも、英語という言語に横たわる規則性を理解し、それをふまえて形態上の訓練をしなければならないのでしょうか。私にはどうしても後者のほうに思えてなりません。

3. 受験英語の功罪

一方で、「日本人は何年も英語を学んでいるのに一向に話せない。これからは自分の考えを英語で伝えることができないといけない。英語学習の中心もコミュニケーション能力の育成だ。」とまことしやかにささやかれています。授業で、形として正確にとらえるという点で英文を説明したり、文法を説明したりすると、「受験英語の産物だ。旧態依然の教授法で

進歩がない。」などと批判されると聞きます。本当にそうでしょうか。

私は受験英語を軽視する考えには納得できません。むしろ日本人の英語力の基本を支えているのは受験英語だとさえ思っています。現在国際社会で活躍されている外交官の方も企業人の方も、受験英語を経験した人がほとんどです。英語学習の成否はこの受験英語をどう生かしていくか、そこにポイントがあると考えています。

確かに、以前の英語教育は細部にこだわりすぎた面があるかもしれません。冠詞の1つ1つの用法を説明したり、普通名詞と集合名詞、抽象名詞などを羅列したりしても、なかなか理解できるものではありませんでした。例外的な規則を気にしすぎる傾向があったことも否定できません。入試では重要項目の1つとされる仮定法をあまり理解していなくても、英語を話すことにおいてはそれほど不都合ではないでしょう。

だからといって、5文型の知識なしに英文を読むことができるのでしょうか。実際、現在分詞と過去分詞の違いも知らないで英文を正確に読めるでしょうか。アメリカ人が英文を読む場合と日本人が英文を読む場合とでは、頭の思考回路に大きな隔りがあると思います。

4. 高校における英語教育の現状

前回の学習指導要領が実施されてから、文法という科目が消えてオーラル・コミュニケーションが導入され、たくさんのALTが授業に参加するようになりました。官制の研修も、ほとんどがこのALTとのチームティーチングをどう展開するかにテーマが移行したように思えます。

確かに現在の高校生は、私たちの頃から比べると抵抗感なく外国人と接しているようです。気軽に話しかけ、それなりのコミュニケーションも成立しているように思えます。しかし、現在のような日本中いたるところに外国人が生活している状況と外国人を目にすることがほとんどなかった過去の状況を比べることなく、このことを「オーラル・コミュニケーション」の成果だと単純に喜んでいいのでしょうか。

他方、正確に英文をとらえるという点では確実に

力が落ちていると考えられます。例えば、be動詞と一般動詞を混在させてみたり、助動詞の後の動詞を平気で過去形にしたりなどです。極端な場合、letterやwhoseのつづりすら正確に書けません。予習となるとただ単語を調べてきて、大体の感覚で意味をとらえている生徒が多く、正確な読み・書きの力が低下してきていることを実感します。

また現実には、高校現場、特に普通科においては、大学入試というものを意識しないわけにはいきません。国公立大学の個別試験においては抽象的な内容の英文が出題されることが多く、下線部訳などで正確に英文を読む力が問われます。大学入試は、これを高校教育課程履修の判定試験とみるか、大学で学ぶのに耐える力の判定試験とみるかで評価は全く違って来るわけですが、やはり後者により重きが置かれていると思われれます。すると、例えて言うならば、過去においては高校入学から大学入試まで3キロ歩んでいけばよかったものが、現在は、大学入学後も見据えて4キロも5キロも歩まなければいけないということになります。

十数年前になされた英語教育のパラダイムシフトの是非を検証することもなく、成果が出ないのは英語教師の責任だと決めつけ、英語教員集中研修などでさらにその方向性を強めていくという文科省の姿勢には、疑問を感じずにはいられません。

5. 英語学習において押さえてなければならない重要な文法項目

以上に述べたような点を考慮すると、英文法の基礎・基本をしっかりと身につけることこそが肝要であると思われます。中学校・高校の英語学習において最低限押さえておくべき重要な文法項目を、以下に挙げておきます。

■ 特に中学校で

これだけのことは中学校で身につけたい[つけさせたい]という項目です。中学校で以下のことが身につけていないと高校でどのようにつまづくのか、ということについても考えてみたいと思います。(以下に×で示しました。)

- ① 主語と動詞の結びつき (文中で主語をとらえることができる力)

× 次の文で主語と動詞がどれかわからない。

In the house stood a man.

② be動詞と一般動詞の区別

× 「いつも英語を勉強する。」を次のように表す。

I am always study English.

③ 現在形—過去形—未来形とその否定形・疑問形, 現在完了形の用法とその否定形・疑問形

× 次の3つの文の違いを説明できない。

He went to Tokyo.

He has gone to Tokyo.

He has been to Tokyo.

④ 疑問詞を用いた疑問文

× 次の文を、下線部を尋ねる疑問文にすることができない。

He learned English by this method.

⑤ 不定詞・動名詞の役割

× 平気で次のように書く。

I am looking forward to see you.

⑥ 分詞の形容詞的用法

× 次の2文の意味の違いがわからない。

A drowning man will catch at a straw.

A drowned man will catch at a straw.

⑦ 関係代名詞の基本的用法

× 次の文のwhichの格・先行詞がわからない。

She said she knew nothing, which I knew was not true.

⑧ 名詞節をまとめるthatの基本的な用法

× 次の文のitが必要なのか不必要なのかわからない。

This book is so expensive that I cannot buy it.

⑨ when, because, ifなどの文と文をつなぐ接続詞の基本的な用法

■ 特に高校で

高校では細かな文法事項や例外的なものよりも、個々の英文を超えて一般的に妥当する事項に重点を置くべきであろうと考えます。

① S-Vの結びつきに始まる文の構造

② 動詞の時制や態

③ 準動詞の働き

④ 節の構造 (特に英文の複雑化は節がその原因)

⑤ 関係詞の役割

また英語の文章を読む場合は、もちろん物語文を読むことも必要ですが、論理的な文章を読むことはそれ以上に必要だと思います。特に以下の点を意識させたいと考えます。

- a. 因果関係一論点・主張に対する根拠
- b. 論点・主張に対する例示
- c. 対比・複数の論点・考えを比較・対比させながら論が展開
- d. 抽象から具体化への展開

文章の要点や概略をとらえる読みよりも、文章の論理構成から作者の視点・考えを正確にとらえたり、物語文であれば心情などにも及んだりする読みをするべきだと考えます。

まとめ

外国語の学習目標は「読む・書く・聞く・話す」の4技能のバランスのとれた発達であることは確かです。ネイティブとも対等にコミュニケーションできるようにすることが理想だとも思います。ただ、現在の中学生・高校生が置かれている状況を考慮せずに理想を掲げても、無理があるのではないのでしょうか。

生徒たちは英語以外にもたくさんの教科を学習する必要があります。学習集団も基本的には40人です。彼らの日常生活には、英語を使う機会はほとんどありません。そのような状況下で、週に数時間の英語の授業を「聞く・話す」ことを中心にして、英語がしっかりした学力として蓄積されていくのかどうかは疑問です。

むしろ、将来いかなる可能性にも対応できる基礎・基本を身につけることこそ、学校教育の中心に置かれるべきではないのでしょうか。生徒たちの中には、大学でいろいろな研究論文を読む者もいるでしょうし、就職したら外資系企業で働く者もいるでしょう。外国人と結婚し、外国で暮らす人もいるかもしれません。そのような将来に備えて、「外国語の基礎学力」を築くことが大切だと考えます。すなわち、英語でプレゼンテーションができたり、英語の論文が読めたり、英文を書いたりすることができるようになるための基礎づくりが必要なのです。

池上嘉彦氏は、次のように言っておられます。

「言語というのは人間の認知の営みをもっとも典

型的に行われる場であり、言語の使われ方‘運用’ばかりでなく、今ある姿そのものつまり‘構造’にも、人間の認知の営みの特性が濃く影を落としている。言語は恣意的な性格のものでなく‘認知’という人間の営みに現れる特徴的な傾向性と関連させて、その成り立ち・働きが十分説明できるものである。」

このような視点は、生徒の知的好奇心の面からも非常に大切です。やはり学校が英会話スクールのようになってはいけません。

さらに学校教育は、時の財界や社会の要請に応えるだけではなく、人間としての成長・発達とは何か、そしてそのための基礎・基本は何かという視点をしっかりとつべきだと思います。

参考文献

池上嘉彦(1995)『「英文法」を考える—「文法」と「コミュニケーション」の間』 筑摩書房

(富山県立富山東高等学校教諭)